

鎌倉時代木彫像の構造と彩色に関する研究

—東京藝術大学所蔵 肥後別当定慶作 木造毘沙門天立像の
復元模刻研究を中心に

東京藝術大学 大学院美術研究科

文化財保存学専攻 保存修復研究領域(彫刻)

博士後期課程3年 王工一

学籍番号:1322932

東京藝術大学大学美術館が所蔵する肥後別当定慶作木造毘沙門天立像は、首柄の内側の墨書により、貞応3年(1224)5月14日に慶派の第3世代の代表的な仏師の1人である肥後別当定慶によって制作されたことが知られている。鎌倉時代には「定慶」を名乗る仏師が4人存在し、藝大像の作者である肥後別当定慶は、京都大報恩寺六観音菩薩像と京都鞍馬寺聖観音立像の作者と同一人物である。現存する肥後別当定慶の作品はそれほど多くないが、本像はその中の1つで、重要な価値を持っている。

現在、藝大像の表面は全体的に黒い汚れ層で覆われており、外観からは本来の色が判別できない状態である。しかし幸いにも、左腕は体幹部から取り外し可能な状態にあり、脇の下に挟まれた部分には、比較的大きな彩色文様が比較的良好に保存されている。これにより、造立当初の鎌倉時代初期の様相を垣間見ることができ、この部分を基に科学調査を行うことで、像全体の彩色復元が可能になると考えられる。ところで、藝大像に対する詳細な調査と研究はこれまで限られており、特に彩色材料に焦点を当てた科学的な調査と研究は未だ進展していなく、本像の細部までの彫刻構造と彩色層に使用された彩色材料に関する詳細は、依然として明らかになっていない。

本研究の目的は、鎌倉時代に彩色が施された木彫像に使用された材料を解明し、制作工程の実態を把握することで、彫刻工程と彩色工程との関連性を制作者の観点から検証することにある。藝大像の彫刻工程と彩色工程を解明するために、構造と彩色に着目した透過X線撮影、3D計測、蛍光X線分析、デジタルマイクロスコープ観察など、多様な手法による分析を行い、得られた分析結果を基に、本像の構造と使用された彩色材料を明らかにした。鎌倉時代に彩色が施された木彫像が実際にどのような経緯で造られたのか、彫刻の制作工程と彩色工程との間にど

のような関係があるのかという問題点に対して実証的に明らかにするため、造像当初に可能な限り近い構造・材料を用いた彩色復元模刻研究を行った。

第1章では、藝大像に関して先行研究で明らかにされた知見に加え、今回の科学調査で得られた新たな分析結果を基に、藝大像の構造と彩色を詳細に検討した。構造に関しては、背板材が上下2材で構成されていることや、右腕上膊部が3材で構成されていることなど、新たな知見が得られた。彩色については、科学調査の所見を総合すると、白色下地に土系白色顔料が使用され、貝殻胡粉を上塗り顔料として局所的に用いられている可能性が高いと推定した。また、彩色に使用された色材については、朱、鉛丹、群青、緑青といった古典彩色でよく使われた無機顔料の使用を確認し、文様と着彩の詳細を検討した。

第2章では、第1章に残されている問題点を解明するために、藝大像と同じ時代背景を共有する類似作例であるアメリカ・ミネアポリス美術館所蔵の木造毘沙門天立像と京都・海住山寺木造四天王立像を比較研究の対象として取り上げた。比較研究の内容は、彫刻の構造と彩色に焦点を当てたものである。特に、藝大像において剥落や変色が著しく、文様や着彩の判別が困難な箇所については、比較研究対象から得られる参考となる彩色文様を基に、藝大像の復元を目指すことを目的とした。

第3章では、前2章で論じた科学調査の分析結果および比較研究を踏まえ、藝大像の復元模刻制作の具体的な工程を詳細に記述するとともに、制作過程で得られた知見を基に、本像の造像過程の実態について考察を行った。特に、右腕と割脚された両脚部の体幹部との接合タイミングの問題について考察し、彫刻工程と彩色工程がどのように相互に影響し合っていたのか、その手順の問題点について論じた。